

186 病院ホストコンピュータとの接続によるRIA検査業務の自動化

間中友季子、渡辺道子、高橋和栄、駒谷昭夫、山口昂一（山形大 放）

ラジオイムノアッセイ(RIA)検査業務における自動化システムを施設独自に開発した。病院内ホストコンピュータ(FACOM M-760)と接続されている放射線部のコンピュータ(DOMAIN 3500)をRIA検査用コンピュータとして使用した。DOMAIN 3500に検体受入力用のタッチコントロール形式のパーソナルコンピュータ(PC-9801VM)、出力用プリンター(LASER SHOT)およびウェル型γカウンタ(COBRA)を接続した。検体受付、検体用ラベル作成、ワークシート作成、報告書作成、保存台帳作成、検体数集計などの煩雑な手作業から解放されて、測定操作以外の部分に時間がかかりすぎるといった問題が解決できた。過去の検査結果の検索も容易に行えるようになった。

187 Pepsinogen I・II RIA・BEADの胃小区CR像との対比検討

辰 吉光、石丸 徹郎、小倉 康晴、延原 美津子、長谷川 怜子、山崎 紘一、清水 雅史、末吉 公三、榎林 勇（阪医大 放）

萎縮性胃炎における胃小区像と、血中Pepsinogen I・IIの値を比較、検討した。上部消化管撮影はCR(Computed Radiography)を用いて行いその胃小区像により萎縮性胃炎の有無またはその程度により5群に分類した。採血は上部消化管撮影直後に行いPepsinogen RIA・BEADにより測定した。各群とPepsinogenの値を比較したところ、I・IIの値と各群間に有意な傾向を認めなかったが、I/IIにおいて正常群と萎縮性胃炎群の間に萎縮性胃炎群の有意な低下を認めた($P<0.05$)。しかし、萎縮性胃炎群の各群の間には一定の関係を見出すことはできなかった。

188 血中ペプシゲン測定キットの基礎的、臨床的検討

秋山 隆、渋谷俊介、松島佳子、堀江 均、畠 啓視、佐川直敏（三菱油化ビニール） 秋山俊夫（築港病院）

ペプシゲン(PG)の血中濃度測定が、胃癌の前癌状態とされる萎縮性胃炎の診断に有用であるか否かについて、市販のIRMA法キット(タケボト社製)を用いて検討した。

本法の基礎的検討成績は、再現性試験、希釈試験、回収試験共に良好であった。PG I・IIは、血清-血漿間で差は認めないものの食後上昇したことから、測定材料は食前採血の血清とした。健康人200名に於ける測定値は、加齢によりPG II値が上昇し、結果としてI/II比は低下した。

判定基準をPG I < 70 ng/mlかつI/II比 < 3.0とした場合、異型上皮(萎縮性胃炎)症例に於ける陽性率は87.1% (27/31)、また健康者群に於ける特異性は88.5%であった。以上より本法は萎縮性胃炎の診断マーカーとして感度、特異性共に優れていると考えられた。

189 IRMAによる膵分泌性トリプシン・インヒビター (PSTI) 測定に関する基礎的ならびに臨床的検討

木谷仁昭、大谷明宏、末廣美津子、河中正裕、福地 稔（兵庫医大、核）

PSTIは急性相反応物質として肺炎、肺癌の診断、その経過観察に有用である。我々は、最近入手が可能となったIRMA法につき基礎的ならびに臨床的検討を行った。

本法の最小検出感度は0.31 ng/mlで、再現性、希釈試験、回収試験等の成績も満足できる結果であった。臨床的検討では、健康人62名における血中PSTI値は3.7 ng/ml ~ 12.9 ng/mlに分布し、急性肺炎では14.7 ~ 2083.4 ng/ml、慢性肺炎で8.6 ~ 193.4 ng/ml、また、腎不全患者においても高値を示した。一方、肺癌、肝細胞癌等の悪性疾患では高い陽性率が得られた。また、従来のRIA法との測定値の比較では相関係数 $r=+0.979$ であった。本法は肺炎などで臨床的に有用との成績を得た。

190 血中膵ホスホリパーゼA₂(膵PLA₂)測定に関する基礎的ならびに臨床的検討

大谷明宏、木谷仁昭、石村順治、樽岡陽子、尾森春艶、福地 稔（兵庫医大、核）

膵PLA₂は消化酵素の一つで、血中PLA₂の増加は肺炎の発症や増悪に重要な役割を果たしている。今回我々は、血中PLA₂測定法につき基礎的ならびに臨床的検討を行った。本法の最小検出感度は50 ng/dlで、再現性、希釈試験、回収試験などの成績もほぼ満足できる結果であった。一方、臨床的検討では、健康人85名での血中PLA₂は111 ~ 403 ng/dlの範囲に分布し、急性肺炎($n=10$)では408 ~ 15217 ng/dlと全例が異常高値を示し、また慢性肺炎($n=39$)では、50 ng/dl以下 ~ 730 ng/dlに幅広く分布する成績であった。以上の結果から血中PLA₂の測定は単に高値のみではなく、低値についてもその臨床的意義が示唆されたことから肺炎疾患の診断および経過観察に有用であるとの結論をえた。

191 膵ホスホリパーゼA₂の基礎的検討及び臨床的有用性について

横井川英男、宮本佳一（ファルコイムノシステムズ） 片岡慶正（京都府立医科大学第3内科）

膵ホスホリパーゼA₂(膵PLA₂)は生体の主要構成要素であるリン脂質を加水分解する消化酵素の一つで、急性肺炎の重症化や組織破壊による臓器障害の進展に関連性があるものとして注目されてきた。今回我々は、シオノリア膵PLA₂ RIAキットを用い、基礎的検討及び各種肺炎患者109名を対象に血中膵PLA₂を測定しその臨床的有用性を検討した。キットの基礎的検討では全てにおいてほぼ満足できる結果であった。

膵PLA₂は肺炎で異常高値を示し、また膵外分泌機能低下では異常低値を示すことより膵病態をよく反映しさらにその膵特異性により、各種肺炎疾患の診断及び経過観察に有用な新しいマーカーであると示唆された。